

巻頭言

地球観測における夢と願いの実現

研究管理官 沢田 治雄

ドイツでは、1887年に気球を利用して森林図を作った。人間は地上を空から自由に観ようと願って、様々な努力と失敗をくり返したが、気球を発明し、100年前(1903年)には、ライト兄弟が動力による飛行を成功させ、航空写真をもたらした。さらに、宇宙から地球を観るという願望が、人工衛星による地球観測を発展させてきた。これらは、科学者のみならず、多くの人々に共通の、夢に近い願望から派生したものである。



現在の人工衛星の画像では、航空写真のように樹木の1本1本が確認できる。人間の眼で見える光だけでなく、水分や、温度のようすを画像として提供してくれる。これらの人工衛星画像を利用して、世界の森林調査が行われている。そして、森林火災を即時に発見・通報する自動処理システムや、毎日の観測から、雲の影響などを取り除いて植物の季節変化や積雪状態を連続的に把握する技術などが森林総合研究所で開発・運用されている。また、持続可能な開発に関する世界首脳国会議(WSSD)では、アジア地域の森林地帯における違法伐採と、火災、荒廃地回復問題への対策強化を目的として、「アジア森林パートナーシップ」を2002年に発足させたが、その主要な取り組みのひとつに、衛星データ利用による森林情報の提供があげられている。

ところで、技術開発では、開発対象を強くイメージすることが大切だ。このような地球観測技術は先達の夢が実現したものであるが、その過程では、同じ夢を見続けた開発者達のイメージしたものへの努力と、それを継ぐ者達があった。航空機の発明は、空を飛びたいという願望の実現であったが、その成功がさらに大きな願いを起こさせて、人工衛星を開発させ、宇宙飛行を可能にした。人工衛星から撮られた写真が、さらに多くの関心を集め、新たな夢を追い求めて、技術進歩に拍車をかけたのである。そして、冷戦時代を通ったこの技術は、地球環境を守り続けるための情報収集システムとしての役割を担い、リモートセンシングという学問を生み出した。我々の研究はこれらの歴史的な背景と、それらの達成に支えられているのである。

今後の森林研究を考えると、アジア森林パートナーシップにみられるように、海外問題における森林総合研究所への期待は極めて大きい。期待に応じるためには、私たち自身が、共通の夢と願いを強力にイメージして、研究にあたることが重要である。動力飛行の成功から100年で火星に探査機を送り届けるまでになったように、夢のようなことも、着実に進めれば、次の世代は想像以上のことをもたらすことを信じよう。しかし、願いは具体的な行動に移し、持続する策を講じなければ、成らないのも道理である。また、夢を追い求める姿は、後世への遺産となるであろうが、現実に森林が維持されなければ、森林研究は成立しえない。森林問題における世界の人々との夢の共有は重要である。

[\[巻頭言\]](#) [\[解説シリーズ\]](#) [\[おしらせ\]](#) [\[特許情報\]](#)

[\[所報トップページへ\]](#)